

# ねりま健育会病院

症 例 概 要 患者：80代後半 女性

病名：左大腿骨転子部骨折

入院期間：令和3年10月 ～ 令和3年12月

経過：2021年7月に転倒受傷。受傷7日後に左BHA術施行。術後7日後のXP上で、左人工骨頭Stem先端部骨折を認めwiring術を予定するも、低酸素血症併発し造影CTで左肺動脈に欠損像認め肺塞栓症併発。手術中止とし内科に転科しDOAC開始。保存的対応となる。8月一過性の心房細動、翌日約5秒の心停止後に洞調律に戻った。その後全身状態安定し10月、回復期リハビリテーション目的に当院転院。

## 内 容

入院時は左股関節屈曲55°・膝関節80°屈曲伸展—15°と著明な可動域制限と運動時痛を認めた。また免荷Planは、転院～2週間まで1/2荷重、転院～4週間まで2/3荷重、転院～6週間で全荷重となっていた。臥床による廃用症候群と股関節可動域制限により端座位保持困難であったため、リクライニング式車いす使用しADLは全～中等度となっていた。FIMは49/126（運動27、認知22）点であった。

リハ介入では股・膝関節可動域拡大、両下肢筋力強化を図り、歩行獲得を目的としてアプローチを行った。また、チームでも離床を図っていった。退院に向け屋内歩行器歩行自立、屋外シルバーカー歩行見守り、長距離移動は車いす介助、トイレ・更衣自立で自宅への退院を目指した。

入院1ヵ月では2/3荷重可能になり、平行棒内での荷重訓練にて疼痛なく可能となった。また、股関節屈曲可動域拡大も認め、端座位保持可能となり、車椅子は普通型へ変更となった。起居動作自立・移乗動作は見守りとなった。

入院2ヵ月で全荷重可能となり、車輪付き歩行器使用して歩行訓練開始した。下肢の筋持久力の増加により歩容安定したため、11月中旬より棟内車輪付き歩行器使用し、整容・トイレ動作含め終日自立となった。さらなる股関節可動域拡大と下肢の筋力強化を図り、屋外での歩行距離の拡大を目指した。

退院時は屋外では、不整地での自制内ふらつきを認めるが、見守りで500m可能となった。また、身の回りのADL動作自立、屋内移動は歩行器歩行自立、屋外はシルバーカー歩行見守りとなり目標を達成したため、12月に自宅退院となった。FIMは113/126点（運動78、認知35）に大幅に改善を認め

た。

退院後、ご本人からの連絡で、長時間台所に立てるようになり、もともと大好きであった料理が行えるようになったとのことであった。夫とともに以前うなぎ屋を営んでいたこともあり、うなぎを焼けるようにまできたからは是非スタッフに食べてほしいと、後日、ご本人が焼いたうなぎを届けてくださり、美味しく頂いた。

80代後半と高齢であり、OPE後再骨折や合併症も発生して、受傷からも期間がかかってからの入院となって、予後不良である患者さんであった。しかし、よくなって歩いて帰りたいというご本人の気持ちに親身に寄り添いながら、スタッフが密に連携し、荷重条件に併せて適切に離床や訓練を進めたことで歩行・IADLも獲得でき、退院後もご本人みずからチャレンジを行い、退院後も元気な姿を見せてくれた症例でした。